# 遠距離女としつこい男

シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠距離女としつこい男

【Ｎコード】

Ｎ７０５４Ｙ

【作者名】

シュウ

【あらすじ】

遠距離恋愛中の女子高生につきまとうしつこい男子高生の恋愛物語。女の子目線で話が進んでいきます。

ちょっと変わったタイプ（？）の現代恋愛物語です。毎日更新していく予定でお届けします。

## あなたが好きです

「好きです！愛してます！俺と付き合ってください！！」
「断る」
「なんで！？」
「・・・何回フラれたら気が済むの？」
「君がＯＫを出してくれるまでさ！」

はぁ・・・ウザイ。
何回告白を断ってもすぐに立ち直って告白してくる。
こいつアルツハイマーかなんかなの？

「何回告白しても一緒よ。私には付き合ってる人が居るんだから諦めてちょうだい」
「しかしそいつとはもう半年以上も会ってないんだろ？だったら俺にもまだチャンスはあるっ！」

いやいや、堂々と「俺と浮気してください」宣言されても困るし。
私には心に決めた人がいるのだ。
今は遠距離恋愛だから会えないだけで、心の底から愛していると言える。
多分向こうもそう思っているはずだ。

「もうチャンスなんて無いから。何回告白しても結果は同じだから。私の考えは変わらないから。私用事あるから。バイバイ」

しっかりと言い切って後ろを振り向く。
背後で何か言っているが、気にしないで歩く。

こいつが私につきまとい始めたのは、三週間前のテストのあとの学校帰りだ。
友達と別れて一人で歩いていた時。

「キミが吉野君子（よしのきみこ）さん？」
「え？はい。そうですけど・・・どちら様ですか？」
「俺の名前は長谷川隆夫（はせがわたかお）。良かったら俺と付き合ってくれないか？」
「・・・は？」

これが最初の告白だった。
私には遠距離恋愛している彼氏がいたので、申し訳ないと思いつつも丁重にお断りした。
しかしこれから毎日毎日学校帰りで一人になったところを告白され続けた。
最初の1週間は告白されたのも初めてだったので、断るのにも少し罪悪感を感じていたけど、こうも毎日告白されては断るのを続けていると罪悪感も何も感じなくなって来る。
毎回同じ場所で告白されるもんだから、2週間目は違う道を通ってみたけどやっぱりダメだった。
まるでストーカーのように私がいる道だけを選んで待ち伏せしている。
これはもう訴えたら勝てるレベル。
もしかしたらからだのどこかに発信機でも取り付けられているのかもしれない。
そして現在の3週間目。
もう違う道を通るのを諦めていつもの道を通り、相手の精神をブッ壊すために全力で断り続けている。
しかしあいつの精神力は底なしか？
何度断っても断っても学習していないかのようにつきまとってくる。

もしかして機械で出来ていて、学習するＡＩを搭載し忘れたのだろうか？
それなら納得がいくが、そんな近未来の話がある訳がない。
私はリアリストだからそんな話は信じたくもない。

「あ。忘れてた。メールしないと」

メールの相手はもちろん遠距離恋愛中の加藤正樹（かとうまさき）。
同い年の１７才で事情があって大阪へ転校してしまったのだ。
当時付き合っていた私と正樹は互いに別れるつもりはなくて、大人になったら会う約束をして遠距離恋愛を続けている。
メールや時々する電話だけが私たちをつないでいるけれど、私達の気持ちはいつも目に見えない何かでつながっていると信じている。
きっと正樹も同じことを思っているはずだ。
そう思いながら私は正樹へメールを送った。

## あなたが好きです（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

前の作品から読んでいただいている方は、いつもありがとうございます。

この作品から読んでいただいている方は、よろしくお願い致します。

なんやかんやでまた恋愛小説に落ち着きましたが、これからも拙い文章ですがよろしくお願い致します。

では次回もお楽しみに！

# 私と正樹

私、吉野君子と加藤正樹が出会ったのは高1の2月。
あまり友好の輪を広げない私の、唯一と言ってもいいこの学校での友達の照井明子(てるいあきこ)が風邪で休んだ日のことだった。
明子以外に話す相手があまりいない私は授業と授業の間の休み時間中は、窓側の真ん中の席でボケーっと外を眺めていた。
朝、明子にメールをしてみたけど寝ているのか、未だに返信はない。
病気は寝て治すのが一番だと思うから返信がないのは仕方がない。
今は昼休み。例によって、今も外を見ている。

「今日も雪がすごいや」

教室の中は暖房がついていてとても暖かいが、窓の外から見える風景は白一色だった。
今日はテレビの天気予報通りの猛吹雪である。
いつもなら上から下に降ってくる雪も、風のせいで右から左へと流れている。
この調子だと帰りの電車は全く動いていないかもしれない。
いや、北海道のＪＲはこんなことじゃ遅れないか。
そんなことを考えながら窓の外を流れていく雪を見ていた。

「あれ。キツネじゃない？」

ふと横から声をかけられた。
声がした方向を横目で確認してみると、窓の柵に手をついて外を見ている男子がいた。

「ほら。どっか行っちゃう」

そう言われて私は慌てて視線を外に向けた。
吹雪のため視界は激悪だが目を凝らして探す。

「どこ？」
「あの木の近く」

言われた木の近くを見てみると、確かに黄土色をしたキツネがいた。
初めて見たわけじゃなくて中学校の時も時々見たことがあったけど、
やはり見れると少し嬉しい。
私自身はこの学校に入って初めて見た。

「俺今年初めて見た」
「私も」
「おーい正樹！次移動教室だぞ！」
「うわっ！ちょっと待ってくれよ！ってわけで移動教室だから。吉野さん。遅れたらダメだよ」

そう言って友達のとこへ戻っていく男子。
どうやらボケーっとしていた私に移動教室のことを伝えに来てくれたらしい。
すっかり忘れていたけど次は理科室で実験をするんだった。
いつもなら明子が教えてくれるんだけど今日は居ない。
彼が来てくれなければ、私は授業開始のチャイムが鳴ってから慌てて移動することになっただろう。
ありがたき幸せ。
それにしても全然話したこともないただの同じクラスの女子に話しかけてくるなんて珍しい人だ。
理科室に向かいながらさっきの男子生徒について考える。
同じクラスなんだろうけど名前が・・・たしか『正樹』って呼ばれ

てたような気がする。
私は名前を覚えるのが苦手だった。

「あの、さっきはありがとう」

今日最後の授業の前の休み時間。
私は彼にさっきのお礼を言った。
私の席は窓側の真ん中ぐらいの席で、彼の席は廊下側の一番後ろの席だった。

「わざわざお礼？別にいいのに」

笑いながら、どういたしまして、と言う彼。

「だって・・・えーと・・・」
「ん？」

彼が不思議そうな顔をする。

「ごめん。名前聞いてもいい？」
「え・・・加藤です」

そりゃ驚くわな。
ほぼ一年間一緒に過ごしてきたクラスメイトの名前もわからないなんてどうかしてると自分でも思った。

「もしかして名前覚えてなかったの？」
「ごめん。私あんまり話さないから」

「いや、いいんだけどさ。でもなんかちょっとショック・・・」
あからさまに肩を落とす加藤君。
なんか・・・ほんとに申し訳ない。

「あ。冗談冗談！吉野さんは気にしないで！」
「なんで私の名前？」
「これが普通だと思うんだけどなぁ」
「私の普通とは・・・私がズレてるのね」
「かもね」

加藤君はそう言って笑った。

「これからもたまに話しかけてもいい？」
「加藤君がいいなら私はかまわないけど」
「ほんと！？良かったー。なんか吉野さんってちょっと近寄りがたい感じだったから断られたらどうしようかと思った」
「そんなに近寄りがたい？」

ちょっとショックだった。
普通に過ごしてるだけなのに。
いや、私の普通はズレてるんだっけ。

「ちょっとね。照井さん以外と話してるのは見たことなかったし、それ以外は頬杖ついて外見てるだけだったし」
「だって明子しか友達いないもの」
「そうなんだ・・・じゃあ僕と友達になってよ」
「そこは契や・・・いや、なんでもない。別にいいけど、友達になってどうするの？」

明子とは共通の話題があるからまだわかるけど、彼は特になにも接点がない。

「仲良くなろうよ。せっかく同じクラスなんだし」
「まぁそれもいいかもね。よろしく、加藤君」
「こちらこそよろしく、吉野さん」

これが私と正樹のファーストコンタクトだった。

## 私と正樹（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

初めは結構のんびり進めていきます。
気長にお付き合いくださいませ。

次回もお楽しみに！

# 友達

学年が変わり、高校2年の4月。
学年が上がる際のクラス替えがあったけど、私は明子と同じクラスになれた。
加藤君とも同じクラスだ。
加藤君とは明子ほどではないけどそれなりに親しい関係になっていて、連絡先を交換したり私の趣味を打ち明ける程度の仲にはなっていた。
私はオタクである。
明子と友達になった時は

「ねぇ吉野さん」
「何？というか誰？」
「誰ってヒドイな。私は照井明子。そんなことより、そのケータイに付いてるのって・・・」
「え？わかるの？」
「まぁね。私も好きだし」
「へぇ。ちょっと意外かも」
「それのどんなところが好き？」

そんな感じで明子とは仲良くなった。
でもオタクであることは二人とも隠していた。
同じクラスにオタクっぽい集団がいるんだけど、あからさまに避けられていた。
時々「フヒヒw」とか「マジで萌えるよな！」とか大声で言ってるのを見ると、あんなのと一緒にされたくない気持ちが芽生えた。
どうしてあーゆー人たちはオタクアピールをするのだろう？
吹っ切れたというよりも、何かしらのオタクであることを自慢して

いるように見えて仕方がなかった。
そんなこともあるせいか加藤君にも隠していたんだけど、これからも友達でいるためには話しておかなければいけないと思いそれとなく話してみた。

「私オタクなんだ」
「へぇー。そうなんだ」
「・・・それだけ？」
「え？なんかごめん。突っ込んだほうがよかった？」
「いや、なんていうか、オタクだよ？」
「えーと・・・別にいいんじゃない？個性だよ。個性」

全然気にしてなかった。
むしろ喜んでた。

「これって僕しか知らないの？」
「まぁ明子は知ってるけど」
「じゃあ男子では僕だけ？」
「まぁそうなるね」
「エへへ」

なんかよくわからないけど、軽蔑されたりしなくて良かったと思った。
オタクのことを知っても全然態度が変わらなくて良かった。
加藤君はわりと誰とでも話すみたいで友達も多かった。
話しかけられても嫌な顔一つしないで楽しそうに話していた。
今回もクラス替えがあった直後なのに、クラスのほとんどの人の名前を覚えていた。
今も明子と三人でその話をしていた。

「え？普通じゃないの？」
「加藤君のいう普通ってハードル高くない？ハードルってゆーか棒高跳びの域なんだけど」
「照井さんはもう覚えてるでしょ？」
「名前は自然と頭に入っていくものですよ。加藤君や」
「つまりどういうこと？」
「まだ覚えてないってこと。で、君子（きみこ）は？」
「私に聞いちゃうの？」
「「ですよねー」」

三人で笑った。

こんな日が続くと思ってた。

「アンタ最近調子乗ってない？」

ある日、トイレに行った明子を見送った教室で同じクラスの女子何人かが私の席へ来て言った。
もちろん名前は覚えてない。
加藤君は他の友達とどこかに行っていた。
私は意味が分からず聞き返す。

「調子に乗ってるって？」
「最近アンタ正樹君と仲良いみたいじゃん。それが調子乗ってるって言うんだよ」
「それがどうかしたの？」
「そーゆー態度がムカツクんだよ！」

ガンッと机を蹴る。

その音にビクッとなって教室にいた人たちの視線が私の席に集まる。
しかしそれも一瞬で、みんな視線をすぐにそらす。
私は思った。
これがイジメってやつか。
実際に自分が当事者になるなんて思ってなかったから全然実感がなかった。
でも現に今、明子も加藤君もいないタイミング、つまり私が一人の時に狙ってきたってことはそーゆーことだろう。
からだはいつもよりぎこちない動きをしているけど頭は冷静だった。

「なんか言えよ」
「私と加藤君はただの友達・・・」
「アンタに無理矢理合わせてるだけだっての。それぐらい気づけよ」
最後まで言わせずに連れの女子が笑う。

「とにかく調子に乗りすぎんな。次は無いからな」
「君子？」

明子が教室に戻ってきた。
それを確認すると女子達は去っていく。
少しホッとした。

「どうしたの？なんかあった？」
「ううん。ちょっと話してただけ」
「そう？ならいいけど」

教室の異様な空気に気づいて明子が心配してくれたのに、私はごまかしてしまった。
それが全ての始まりだった。

## 友達（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

しばらく鬱展開が続きますが、あと数話の辛抱です。
お付き合いください。
今回は勢いだけじゃないんだからね！
ちゃんとラブコメにしてやるんだからね！

ということで次回もお楽しみに！

## イジメ

あの日を境に私はやたらと絡まれるようになった。
一人の時に悪口を言われるのは当たり前で、すれ違いざまに足をかけられたり、上靴が片方だけ全然違うところにあったり、机の中に画ビョウが大量に入っていたりもした。
全部挙げるとキリがないけど、全部私が誤魔化せば隠せる範囲のイタズラだった。
しかし私は明子や加藤君に迷惑をかけたくなかったので隠し続けた。
明子も私と同じで学校には友達が居なかった（学校外にはいるらしい）から一緒にいることが多かったけど、それでも少しだけ明子が離れるタイミングを見計らってやられていた。
それでも私は明子にバレないようにしていた。
陰湿なイジメが始まって1ヶ月が経とうとしていた。

「君子。大丈夫？」
「え？何が？」
「何がって・・・なんか最近ビクビクしてない？」

ドキッとした。
できるだけバレないようにしていたのに無意識のうちに態度に出てしまっていたようだ。

「そんなことないよ。多分昨日見たテレビが怖かったからかも」
「そう？ならいいんだけど。なんかあったら言ってね」

そんなある日。
机の中に手紙が入っていた。
私は二人に気づかれないように恐る恐る開いてみた。

『今日の放課後、校舎裏に来い。来なければ照井にバラす』

校舎裏には学校の中からも、グラウンドからも全くの死角になっている場所がある。
多分そこに来いということだろう。
私は放課後、明子に適当な嘘をついて指示通りに校舎裏に行った。
明子にも加藤君にも迷惑はかけられない。
私が校舎裏についた時には誰もいなかった。
それから１０分ぐらい待った。
コツコツとローファーがコンクリートの地面を鳴らす音が聞こえてきた。
だんだん近づいてくる。
ついに私の視界に3人が入った。

「うわ。ホントにいるし」
「何の用？」
「勝手にしゃべるな！」

言いながら一人が蹴ってきた。
私は避けることができずに、そのまま左足に受けて膝を付く。

「お前な。いい加減にしろよ？私たちが忠告してやってるんだから大人しくしてろよ」
「だからただの友達・・・」
「しゃべるなって言ってるだろ！」

また私を蹴ってきた。
今度は一発だけじゃなくて二発、三発と続けて蹴る。
私はついに耐え切れなくなってその場に倒れる。

「なんかむかついてきた。お前の髪って私の髪型をかぶってるんだよな」
「たしかに！」
「ねぇ切っちゃおうよ。ほらハサミもあるし」
「準備いいなぁ。よし。これから散髪してやるよ」

ハサミを持っていない二人が私を無理矢理起こし、両腕を押さえて壁に立たせる。

「ちゃんと押さえとけよ」

髪の毛にハサミが近づいてくる。
髪で済むなら安いもんだと思った。
きっと切ったら満足してイジメが終わるかもしれない。
そう考えていた。
しかし現実はそんなに甘くなかった。
腕を押さえていた一人が言った。

「こいつの制服切っちゃえばもう学校来ないんじゃね？」
「たしかに」
「お前頭いいな。じゃあ散髪から制服の裁断にするか」

髪の毛に迫っていたハサミは方向を変えて、スカートの裾へと向かっていった。
制服を切られたらバレちゃう！
親にも隠してるのに！

私は必死に抵抗した。

「こいつ急に暴れやがって！」

「おとなしくしろ！」

両腕を押さえられながらも必死に抵抗する私。

しかしハサミは止まらない。

ついにはスカートを手で押さえながらハサミを入れてくる。

「何やってる！」

その声に反応して全員が声のした方向に目を向けた。

ハサミを持った女の後ろに加藤君が見えた。

「加藤君・・・」

「吉野さん！？」

驚いて目を丸くする加藤君。

三人はハサミを後ろ手に隠すと、何もなかったかのように私を開放した。

「・・・何してるの？」

「・・・・・・」

私は答えられない。

「私たちと遊んでたんだよ。なぁ？」

「そうそう！」

「たしかに！」

三人は口々に言った。

「そうなの？吉野さん？」

何も言えずにただ立っているだけの私。

「吉野さん。こっちに来て。一緒に帰ろう？」

フルフルを首を振る。

「ねぇ。正樹くん。もうこんなやつに関わるのやめなよ」

一人が言った。

「どうして？」

「だってこんな根暗で地味なやつと、正樹くんみたいな元気な人は関わっちゃいけないと思うんだ」

「たしかに」

「私もそう思う！」

「でも僕は吉野さんの友達だし」

「友達って・・・私たちは友達じゃないの？」

「友達だけど、吉野さんも友達だから」

「じゃあ私たちと吉野さんならどっちを選ぶの？」

私のほうを見てくる加藤君。

「吉野・・・さんかな」

「加藤君・・・」

途端にしおれた様子になる三人。

「わかった。こいつのことが好きなんでしょ！」

ハサミを持っていた女が叫んだ。

他の二人も驚いている。

私はドキッとした。

「・・・うん」

「え・・・」

加藤君は私を見ながら頷いた。

「マジかよ・・・帰る」

「ちょっと待てよ！置いてくなよ！」

「たしかに！」

そう言って三人は加藤君の横を通って去っていった。

## イジメ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると興奮します。

一応次で過去編が終了します。
今のところ君子目線でお送りしていますが、真の主人公は最初に出てきたあの男ですからね。
期待していてください。

では次回もお楽しみに！

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7054y/

---

遠距離女としつこい男

2011年11月23日14時48分発行